

# 第1章 伊那市の概要

まずは、伊那市がどのような場所にあり、どのような特徴を持った土地なのか、様々な図やグラフで説明します。現在の様子を知ること、これからどうすればよいのかを考えることができます。



## 1 位置・地勢

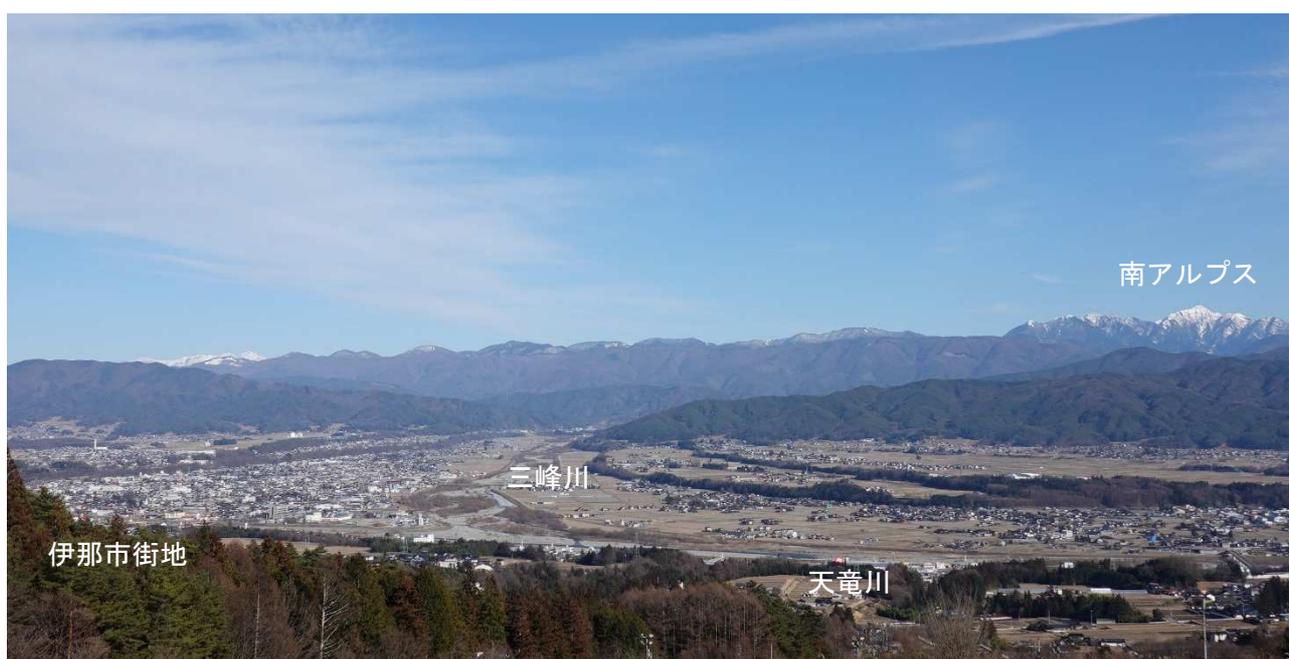


伊那市は長野県内で3番目に広く、2つのアルプスに囲まれた盆地の中央には天竜川が流れています。  
市内は、10地域(伊那(竜西)、伊那(竜東)、富県、美篁、手良、東春近、西箕輪、西春近、高遠町、長谷)に分けられます。

伊那市は長野県の南部に位置し、南東側は南アルプス(赤石山脈)を境に山梨県と静岡県に接し、西側は中央アルプス(木曾山脈)を境に木曾地域に接しています。東西の長さは37.2km、南北の長さは44.7kmに及び、市域の面積は667.93km<sup>2</sup>で、松本市、長野市に次いで県下3番目に広く、長野県の総面積の5%を占めます。市内東部に南アルプス国立公園と三峰川水系県立公園、西部に中央アルプス国立公園を有し、南アルプス、中央アルプスという2つのアルプスに挟まれた中央部には、標高約600mの伊那盆地が開けています。市内の標高の最高地点は、南アルプス塩見岳東方山頂の標高3,052mで、最低地点である東春近田原天竜川河畔の標高590mと比較すると、2,500m近い標高差があります。伊那盆地の中央を流れる天竜川は、三峰川などの支流を合わせて南下し、天竜川に向かう形で山麓には扇状地、河川沿いには河岸段丘が形成されています。

伊那地域の中央部を南北にJR飯田線が走り、中央本線・東海道本線へ連絡しているほか、中央自動車道や一般国道153号をはじめ、同361号、同152号や県道が縦横に走り、東西・南北が結ばれています。

市域は伊那(竜西)、伊那(竜東)、富県、美篁、手良、東春近、西箕輪、西春近、高遠町、長谷の10地域に区分されます。



西春近から伊那市街地を望む

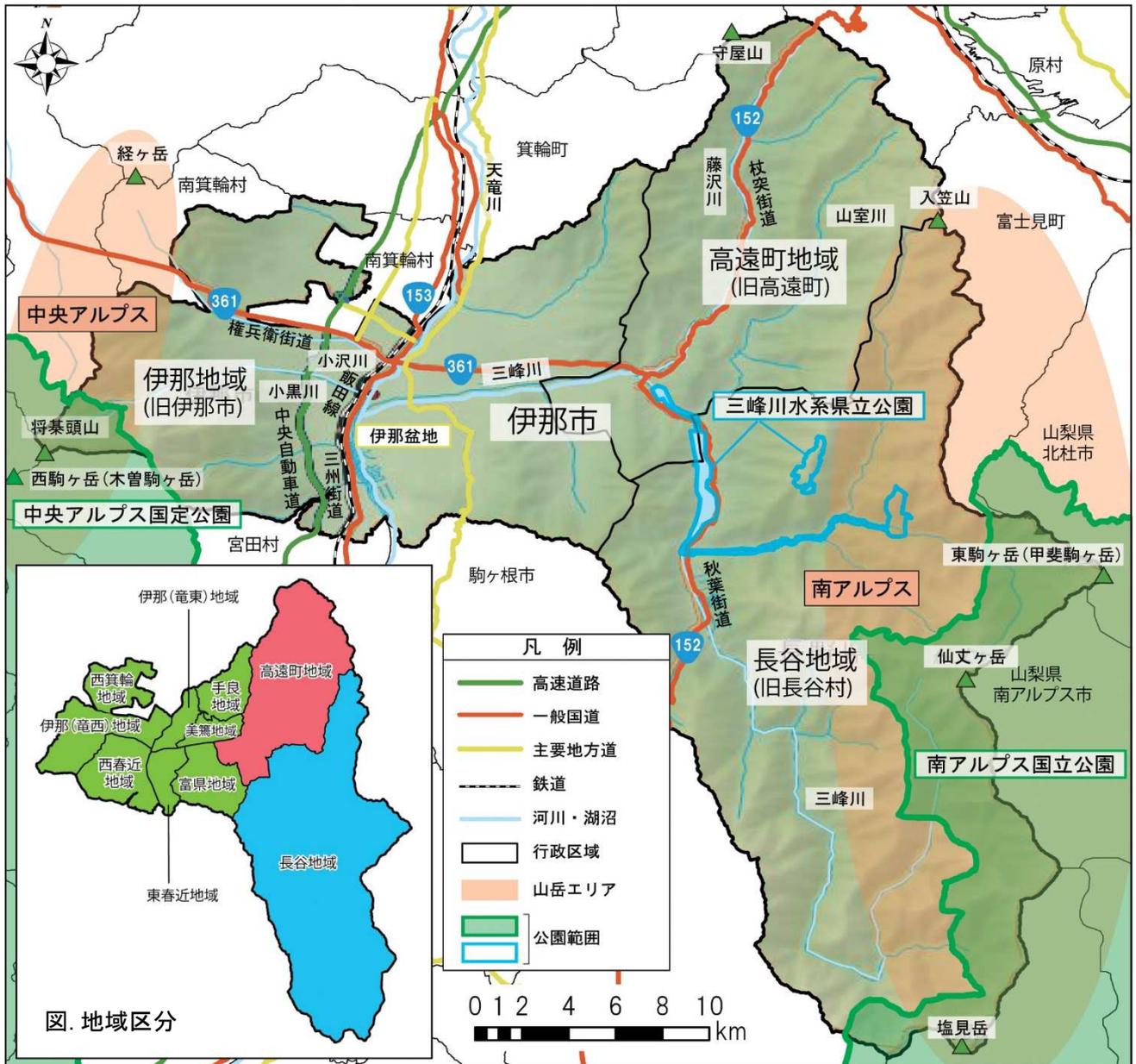


図. 伊那市の概況

(資料：国土交通省 国土数値情報)

## 2 自然的環境



市の中心には南北にのびる日本最大の断層(地面のずれ)があります。最も低い所と最も高い所の標高差が約2,500mもあるので、たくさんの種類の植物が見られます。ここでは、伊那市の歴史文化が生まれた背景にある、自然環境を確認します。

### 2-1 地質

伊那市高遠町北端の杖突峠から長谷南端の分杭峠まで中央構造線が貫いています。中央構造線とは、関東地方から九州地方まで1,000km以上に渡り延びる我が国最大級の断層です。

中央構造線を境として、東側は主に変成岩で形成されており、南アルプス周辺部は固結堆積物が広がっています。西側は主に深成岩で形成されており、三峰川や天竜川といった河川の周辺では未固結堆積物が広がっています。

また、杖突峠と守屋山の周辺部では火山性岩石が確認できます。

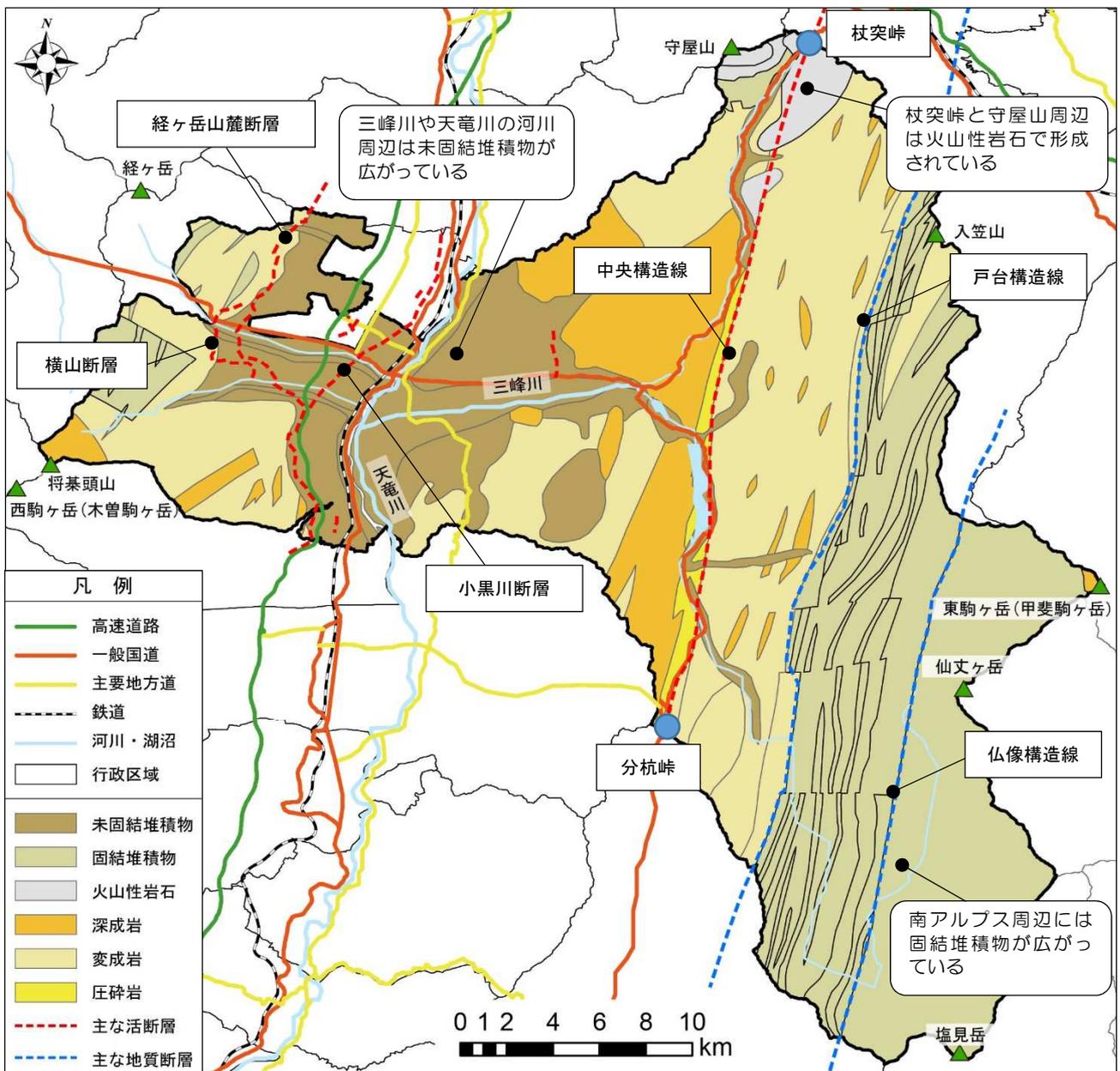


図. 伊那市の地質

(資料：国土交通省「20万分の1土地分類基本調査」、「伊那市防災マップ」)

## 2-2 植生

約 2,500mもの標高差がある伊那市には、多種多様な植物が生育しています。植生図によると、最も広範囲に広がるのは、人が暮らす平野部や人里近い山に見られる「植林地・耕作地植生」で、農作物や生活利用が可能なカラマツやヒノキなどの植林が多いことが分かります。植林地や耕作地に隣接して、コナラやミズナラなどの落葉広葉樹が多く見られる「ブナクラス域」と呼ばれる林域があちこちで見られますが、これはいわゆる里山に見られる植生で、自然植生ではなく人間活動の影響によって生まれた二次林などの植生(代償植生)です。また落葉広葉樹ばかりでなく、アラカシやシラカシ、サカキといった常緑広葉樹が多く見られる林域「ヤブツバキクラス域」も中央アルプス山麓にわずかに見られますが、ここもまた人間活動の影響を受けた代償植生です。標高 1,700～1,800mを超えると常緑針葉樹林域である「コケモートウヒクラス域」が広がっており、特に南アルプス一帯では、標高 2,600m付近の高所にまでシラビソやコメツガの天然林が広がり、森林限界が高く、懐深い森が南アルプスらしさだと言われています。

また、伊那市を特徴づける植生として、河岸段丘沿いに発達した段丘林が挙げられます。農地や市街地として開発が進んだ平野部には自然植生が少なく、平地林や山地から平地にかけて連続する段丘林は緑のベルトとして、多くの動植物の生息・生育環境になっています。

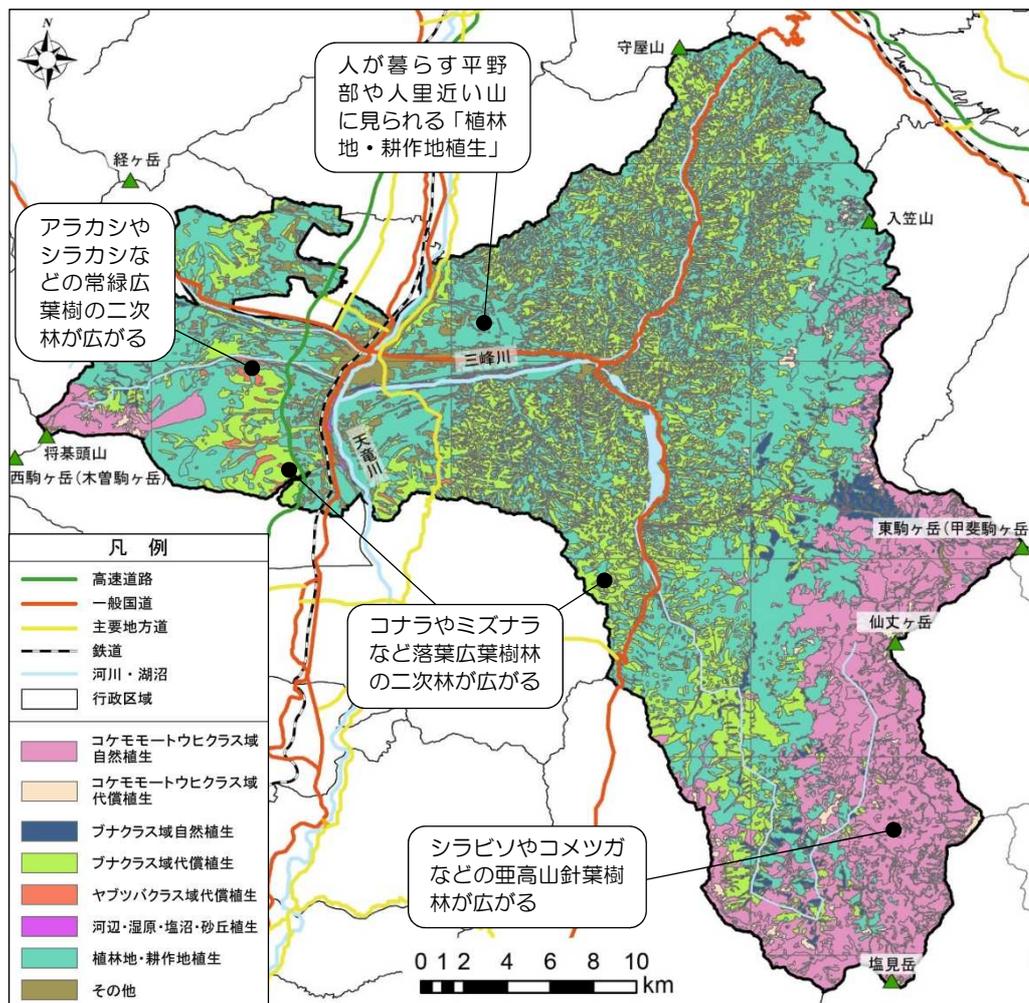


図. 伊那市の植生

(資料:「第7-8回自然環境保全基礎調査植生調査報告書」  
(環境省生物多様性センター))

(<http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-006.html>)

※1/25,000 植生図「木曾駒ヶ岳」、「伊那宮田」、「伊那」、「鹿塩」、「間ノ岳」、「市野瀬」、「仙丈ヶ岳」、「信濃溝口」、「甲斐駒ヶ岳」、「高遠」、「信濃富士見」、「辰野」、「茅野」GISデータ(環境省生物多様性センター)を使用し、(株)地域総合計画が作成・加工したものである。  
(<http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-006.html>)

## 2-3 気候

伊那市は長野県の南部に位置しており、海岸線からも離れていることから内陸特有の気候です。

気象観測所伊那地点の過去10年間の気象データを見ると、最高気温は34～37℃台、最低気温は-14～-9℃台で推移しており、海岸地方と比べて、年間の寒暖差が大きいのが特徴です。

年度別の降水量は1,140～1,780mmの間で推移しており、年間降水量の平均値は1,514.9mmです。

長野県内では、北部や中部と比較

して、南部の降水量が多い傾向がありますが、南部の他地点の年間降水量と比較した場合、伊那市の降水量は少ないといえます。

また、平成26年(2014年)から令和5年(2023年)の気象庁データによると、平均年間日照時間は2,132.7時間であり、長野県内でも日照時間の長い地域といえます。

表 伊那地点の過去10年間(平成26～令和5年(2014～2023年))の気象データ

年	気温			降水量 (mm)	日照時間 (h)
	最高気温 (℃)	最低気温 (℃)	平均気温 (℃)		
平成26年(2014年)	36.0	-11.2	11.8	1425.5	2124.3
平成27年(2015年)	35.9	-11.0	12.7	1550.5	2106.7
平成28年(2016年)	35.2	-14.5	12.9	1641.0	2119.1
平成29年(2017年)	34.8	-10.9	11.8	1143.5	2134.3
平成30年(2018年)	37.2	-10.7	12.9	1701.0	2302.6
令和元年(2019年)	36.1	-9.6	12.8	1398.5	2098.5
令和2年(2020年)	36.6	-9.0	12.9	1644.0	2127.3
令和3年(2021年)	36.7	-9.2	12.7	1777.5	1816.9
令和4年(2022年)	36.7	-10.9	12.6	1255.5	2145.2
令和5年(2023年)	36.7	-12.0	13.3	1611.5	2351.7

(参考：気象庁公開過去の気象データ)

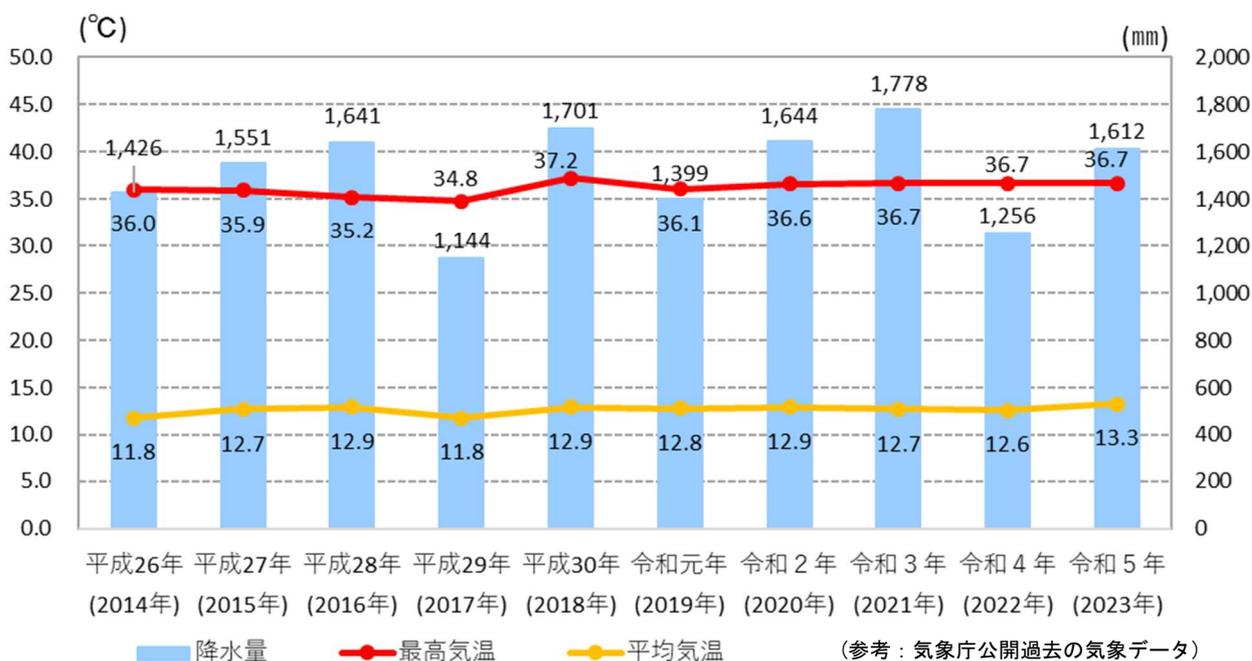


図. 伊那地点の過去10年間(平成26年～令和5年(2014～2023年))の気象データ

表 長野県内他地点の過去10年間(平成26年～令和5年(2014～2023年))の降水量と日照時間の平均値

北部			中部			南部		
地点	年間降水量 (mm)	年間日照時間 (h)	地点	年間降水量 (mm)	年間日照時間 (h)	地点	年間降水量 (mm)	年間日照時間 (h)
野沢温泉	1598.5	1609.1	上田	944.0	2284.5	伊那	1514.9	2132.7
飯山	1382.2	1755.1	佐久	930.8	2247.4	木曾福島	2022.4	1872.9
長野	992.6	2037.9	松本	1048.6	2227.9	飯田	1807.6	2152.7
信州新町	1070.0	1869.6	諏訪	1370.4	2246.6	浪合	2824.9	1685.6

(参考：気象庁公開過去の気象データ)

### 3 社会的環境



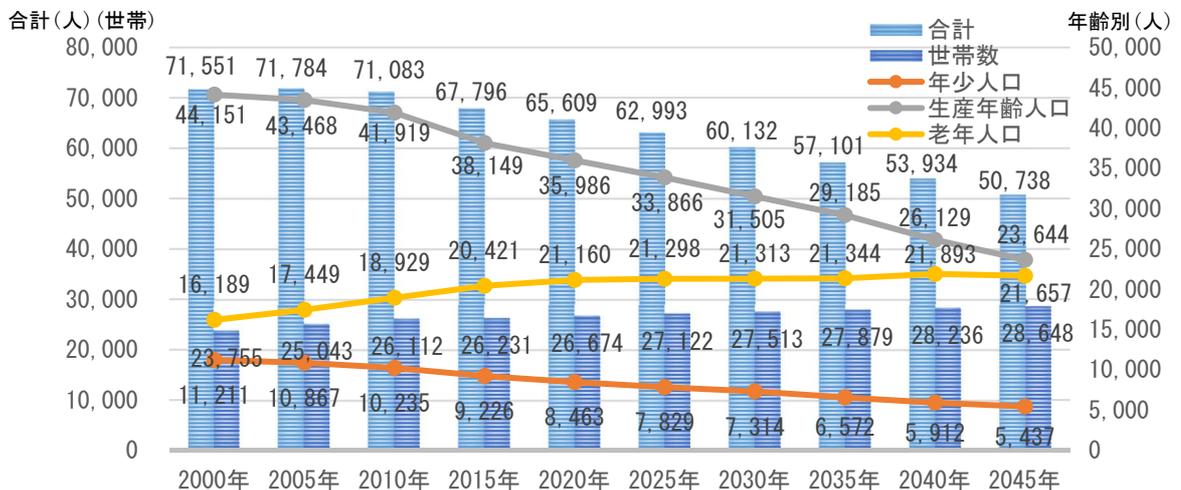
人間の生活によって作り出された環境を社会的環境といいます。  
市内にはどのくらいの人が入り、どのような仕事をして、どのような土地利用をしているのか、また市外から訪れる人がどのくらいいるのかを見ていきます。

#### 3-1 人口

##### (1) 市全体の人口

伊那市の人口は、令和6年(2024年)4月1日現在65,119人です。平成17年(2005年)までは横ばい傾向でしたが、自然動態での出生数の減少と、社会動態での転出者超過により、それ以降は徐々に減少しています。「第2期伊那市地方創生人口ビジョン」では、令和27年(2045年)の将来人口は50,738人で、現在よりも約15,000人減少すると予測しています。

年齢3区分別人口で見ると、令和27年(2045年)では年少人口、生産年齢人口は減少するとともに、老年人口も増加後、減少すると見込まれており、各地区においても同様の傾向が見られます。



	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年	令和7年	令和12年	令和17年	令和22年	令和27年
年少人口割合	15.7%	15.1%	14.4%	13.6%	12.9%	12.4%	12.2%	11.5%	11.0%	10.7%
生産年齢人口割合	61.7%	60.6%	59.0%	56.3%	54.8%	53.8%	52.4%	51.1%	48.4%	46.6%
老年人口割合	22.6%	24.3%	26.6%	30.1%	32.3%	33.8%	35.4%	37.4%	40.6%	42.7%
平均世帯人員	3.01	2.87	2.72	2.58	2.46	2.32	2.19	2.05	1.91	1.77

※ここには、所在地区不明の人数は含まれていません。(資料：『第2期伊那市地方創生人口ビジョン』令和2年(2020年))

図. 総人口・年齢区分別人口の推計

##### (2) 地域別人口

地域別の人口(令和6年(2024年)4月1日現在)は、伊那(竜東)地域が16,943人で最も多く、次いで伊那(竜西)地域の12,783人です。この2地域で、市全体の人口のほぼ半分を占めています。世帯数も伊那(竜東)地域が7,634世帯で人口と同様に最も多く、次いで伊那(竜西)地域が5,930世帯です。



図. 地域別人口・世帯の状況

※人口・世帯数は令和6年(2024年)4月1日現在(住民基本台帳より)

また、旧市町村単位で見ると、伊那地域(旧伊那市)が58,483人、高遠町地域(旧高遠町)が5,079人、長谷地域(旧長谷村)が1,557人です。

### (3) 地域別人口の推移と将来推計

「第2期伊那市地方創生人口ビジョン」では、伊那市の人口は令和27年(2045年)に50,738人になると見込んでいます。平成12年(2000年)から令和27年(2045年)までの地域別人口の推移を見ると、西箕輪地域では6,500人前後で横ばいですが、それ以外の9地域では減少します。特に伊那(竜西)地域は6,209人(41.2%)減の8,851人、美篤地域は3,165人(35.4%)減の5,782人、高遠町地域は4,078人(57.9%)減の2,962人となり、他の地域と比べて急激に減少します。

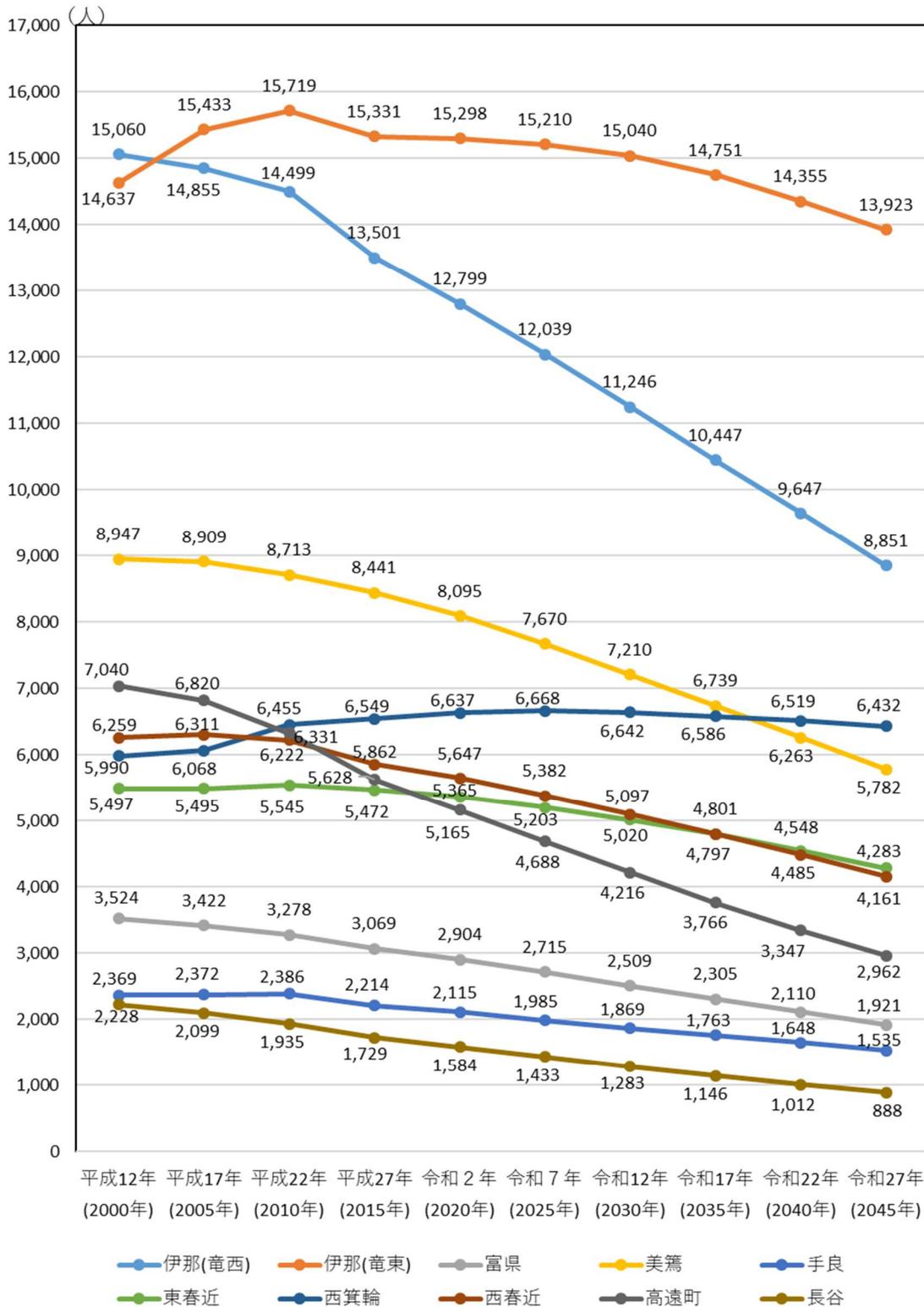


図. 地域別人口の推移

(参考: 『第2期伊那市地方創生人口ビジョン』(令和2年(2020年)))

※平成27年(2015年)までは国勢調査による実数値、令和2年(2020年)以降は、国立社会保障・人口問題研究所による推計値

### 3-2 産業

伊那市の就業者数は、平成12年(2000年)には38,000人を超えていましたが、以降は徐々に減少傾向にあり、令和2年(2020年)時点では34,555人でした。産業別に見ると、第1次産業と第2次産業従事者は減少し続けており、特に第2次産業従事者は平成12年(2000年)より10%程度減少しています。一方で、第3次産業従事者は増加傾向で、平成12年(2000年)より10%程度増加し、20,390人でした。長野県内他市町村と比較した場合、全体に占める第2次産業の割合が多いのが伊那市の特徴です。

産業大分類別に見ると、製造業が最も多く9,284人、次いで卸・小売業が4,381人、医療・福祉が4,412人の順です。農業も2,500人を超えており、4番目に多くなっています。

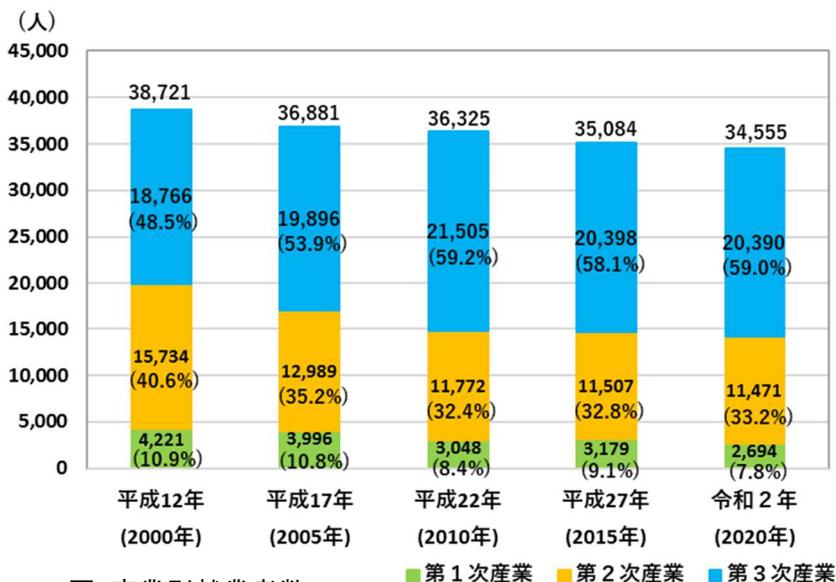


図. 産業別就業者数

(参考：令和5年(2023年)伊那市統計書)

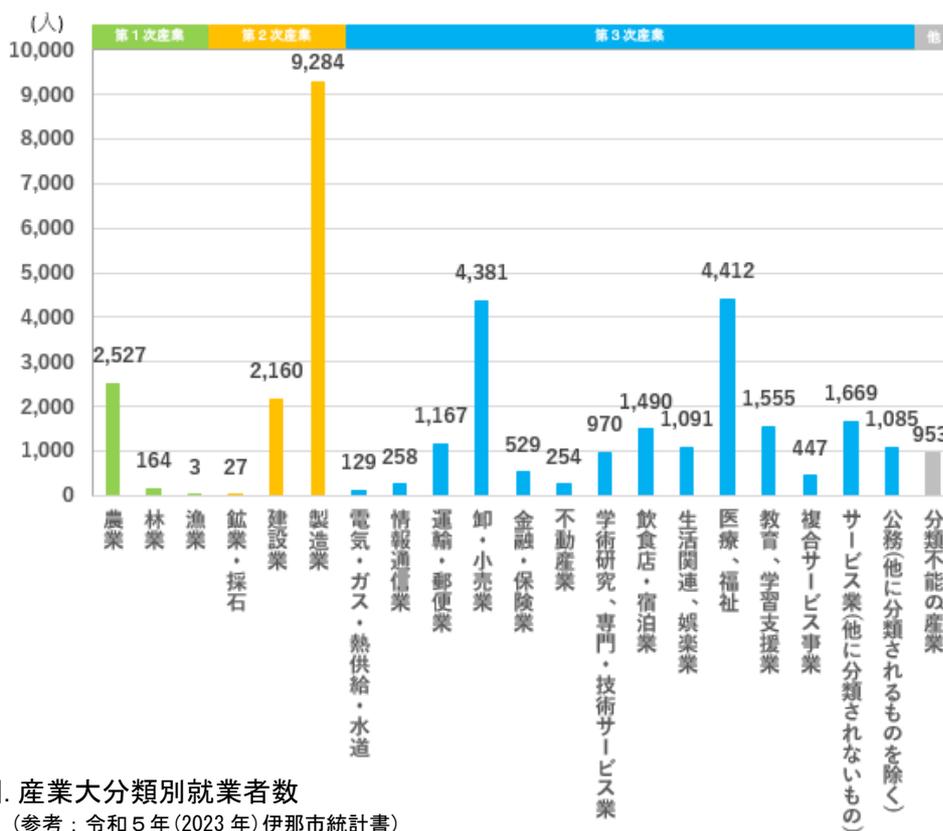


図. 産業大分類別就業者数

(参考：令和5年(2023年)伊那市統計書)

### 3-3 観光客数

平成30年(2018年)から令和4年(2022年)までの観光客数の推移を見ると、平成30年(2018年)から令和元年(2019年)までは増加していましたが、令和2年(2020年)は、新型コロナウイルスの影響でかなり減少しました。令和2年(2020年)からは、令和4年(2022年)まで年々増加しています。地域別の構成比を見ると、伊那地域が半数以上を占めており、高遠町地域が3割、長谷地域が1割です。

観光地点別に見ると、伊那スキーリゾートや伊那食品工業(かんてんぱぱガーデン)がある伊那西部高原が最も多く、次いで羽広、高遠城址公園の順です。

令和4年(2022年)の月別の観光客数の推移を見ると、最も多いのは4月です。これは高遠城址公園の桜を見に訪れる観光客が多いためです。伊那地域では5月、長谷地域では8月の観光客数が最も多くなっています。

表 伊那市の主な観光地

観光地名		主な施設等
伊那地域	羽広	みはらしファーム 羽広荘(令和4年閉館) みはらしの湯
	伊那西部高原	伊那スキーリゾート 伊那食品工業
高遠町地域	高遠城址公園	城址公園 高遠町歴史博物館 信州高遠美術館 さくらホテル
	高遠温泉さくらの湯	さくらの湯
	入笠山	山小屋入笠農協ハウス
	遠照寺・山室溪谷	遠照寺
	千代田湖、晴ヶ峰、青少年自然の家	国立信州高遠青少年自然の家
長谷地域	鹿嶺高原	雷鳥荘・バンガロー
	南アルプスむら長谷・美和湖	南アルプスむら
	南アルプス北部・分杭峠	林道バス
		北沢峠こもれび山荘
仙丈小屋 分杭峠		

(参考：令和5年(2023年)伊那市統計書、令和4年(2022年)長野県観光地利用者統計調査)

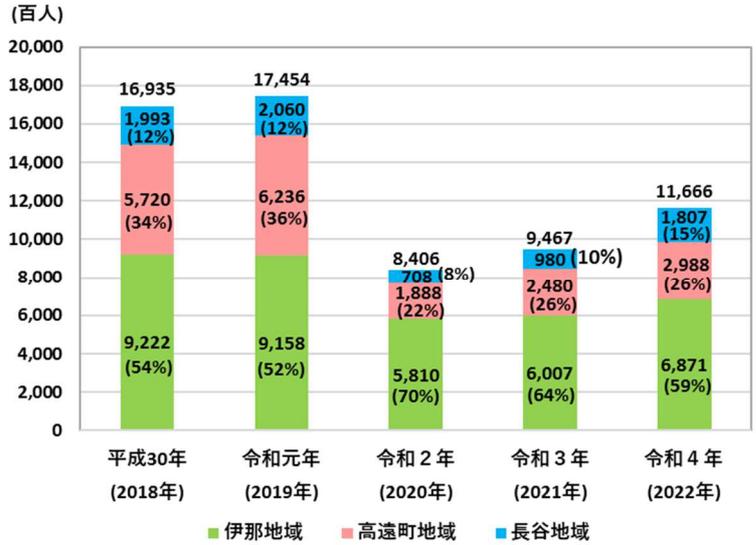


図. 地域別年間観光客数の推移

(参考：令和5年(2023年)伊那市統計書)

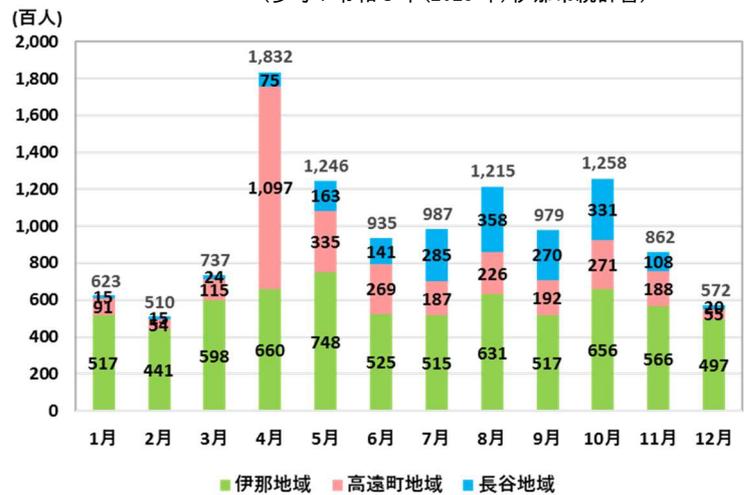


図. 月別観光客数の推移

(参考：令和4年(2022年)長野県観光地利用者統計調査)



図. 伊那市の主な観光地の位置

### 3-4 土地利用

伊那市の土地利用は大きく分けて、農地、住宅地、商業地、工業地、森林で構成されます。

高遠町地域や長谷地域からなる市域の東側は、南アルプス国立公園と三峰川水系県立公園、西側は中央アルプス国立公園に指定されており、3,000m級の山々を有する山岳地や森林地域が広がっています。

伊那(竜西)地域の天竜川右岸に市街地が発達し、古くからの住宅地や商業地が集中するほか、国道153号沿いや天竜川左岸の都市計画道路環状南線(ナイスロード)沿いには郊外型の店舗や企業が多数立地し、商業地帯が形成されています。こうした市街地の外周部には広大な優良農地が広がるほか、広い段丘面を利用した工業団地が整備されています。

また、高遠町地域、長谷地域においては、古くからの城下町であった西高遠地区にも商業地が形成されているほか、中央構造線に沿って南北に流れる三峰川やその支流である藤沢川、山室川(河川の位置は17ページの図「伊那市の概況を参照)を中心に、南北方向の谷筋に集落や農地が見られます。

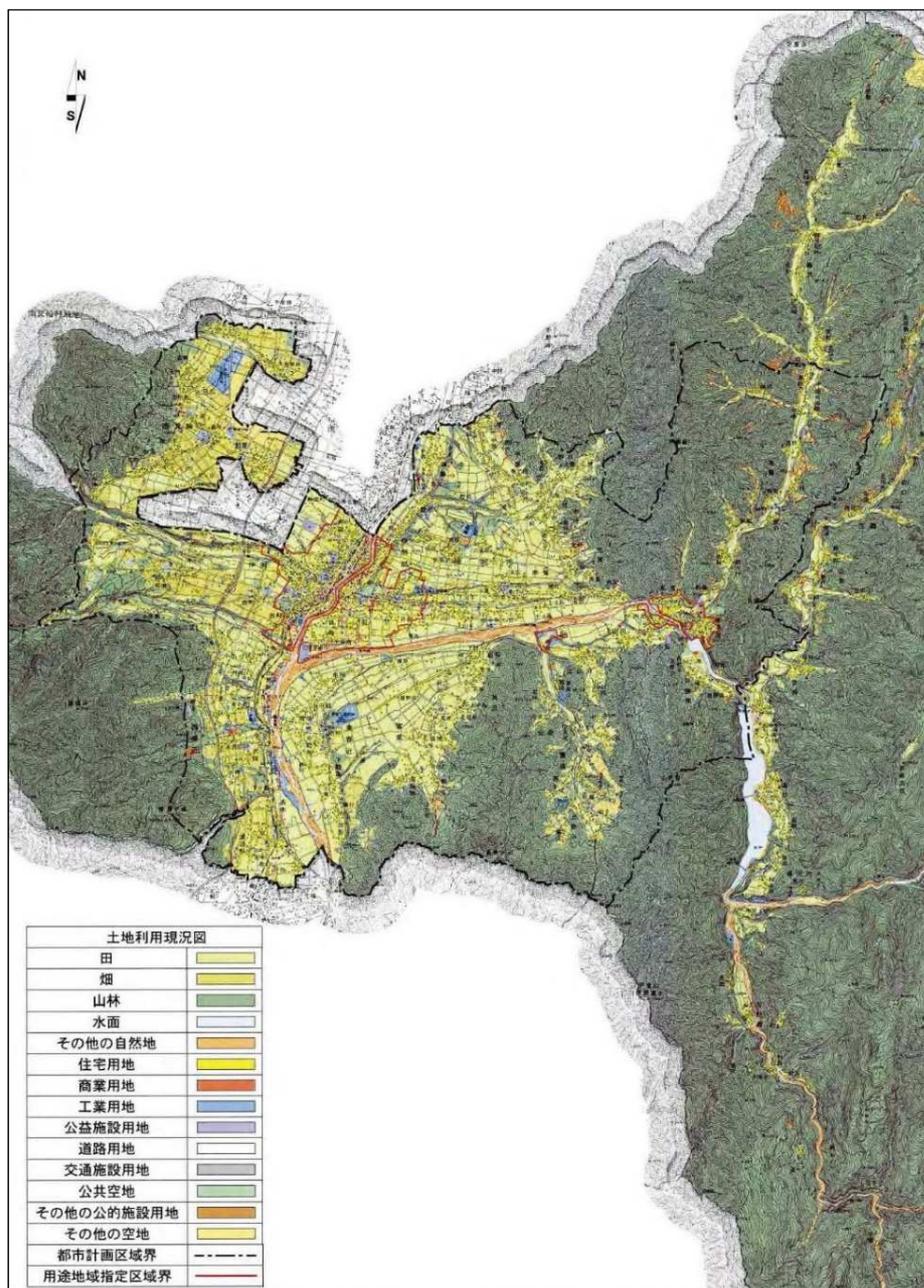


図. 土地利用の状況 (参考: 『第2次伊那市総合計画 基本構想・前期土地利用計画』平成31年(2019年) 『伊那市都市計画マスタープラン』平成21年(2009年))

## 4 伊那市の歴史



4万年前から現在までの長い間、伊那市周辺の人々はどのような暮らしを送ってきたのでしょうか。私たちのご先祖様が暮らした環境や、暮らしの中で生み出したもの、使ってきた物が、私たちの宝物になっています。

### 4-1 旧石器時代

今から約3万5千年前の後期旧石器時代、日本列島に初めて人類が住み始めます。伊那谷でもその頃から人が暮らし始め、食料となる動物を求めて移動する生活を送っていました。戸台秋葉洞窟〔長谷地域〕では、化石化した大型哺乳動物の長さ20cm、太さ3cmの趾骨(かかとの骨)が炭化物とともに出土しています。しかもこれらの骨は、人工的に縦に割られ、髄が食べられた形跡も遺っていました。このステップバイソン(野牛)と考えられる骨の欠片は全部で5点出土しています。骨のほかに石器などの人工物はありませんでしたが、洞窟で肉を焼いて食べていた、当時の人々の暮らしが思い浮かぶような遺跡です。

また、牧ヶ原遺跡〔伊那(竜西)地域〕からは、尖頭器(槍先)22点、ナイフ形刃器3点、原石8点、尖頭器の削片(石器作りの石クズ)257点など、計488点が出土しました。この遺跡は、旧石器時代末から縄文時代草創期の主に尖頭器を作る石器製作跡と考えられています。

神子柴遺跡は、伊那市に隣接する南箕輪村にあり、旧石器時代から縄文時代に遷り変わる1万5千年前の遺跡で、石器が87点発見されています。この中の大型の石槍と磨製石斧は、国内初の発見で、遺跡の名前をとって「神子柴型尖頭器」、「神子柴型石斧」と呼ばれています。この石器文化は、中部高地を中心に全国に広がっていたことがわかっています。

市内には全部で12か所に旧石器時代の遺跡があり、その大半が天竜川の西側にあります。美篤・東春近・高遠町地域や長谷地域となる入笠山の南側でも旧石器時代の石器が見つかっており、市のほぼ全域で旧石器時代の人々が活動していたこととなります。



化石骨 戸台秋葉洞窟出土



石器と削片 牧ヶ原遺跡出土



神子柴遺跡発掘の様子

### コラム

#### 日本で最も美しい石器「神子柴遺跡出土品」

「日本で最も美しい石器」と称される、国指定重要文化財「神子柴遺跡出土品」は、伊那市創造館で常設展示しています。尖頭器には岐阜県の下呂石や新潟県の玉髄、長野県内和田峠の黒曜石が石材として使われており、石斧には神子柴遺跡近辺で採取できる緑色岩や黒雲母片岩などが使われています。神子柴型の尖頭器と石斧が、このようにたくさん一緒に出土した事例はほかになく、今も研究の対象となっています。



伊那市創造館 常設展示室

## 4-2 縄文時代

今から約1万5千年前から約2千3百年前が縄文時代です。縄文時代になると、人々は移動生活をやめ、ムラを作り定住するようになりました。シカやイノシシを狩り、ドングリやクリなどの木の実、その他の植物を採集して暮らしていました。

約1万2千年もの間続いた縄文時代は、古い順に草創期・早期・前期・中期(前葉、中葉、後葉)・後期・晩期と6つに分けられています。伊那市には280か所の縄文時代の遺跡があり、縄文時代草創期から晩期まで全ての時期の遺跡が見られます。これら市内の縄文時代の遺跡の立地を見ると、段丘面の端部や山の麓に多く分布しており、ともに狩猟・採集・漁猟に都合が良く、また水を得やすい場所にあったと言えます。

縄文時代草創期(約1万5千年前～1万年前)は、旧石器時代と縄文時代の過渡期にあたり、最終氷期が終わり、次第に気候が暖かくなり始める時期です。市内ではこの時期の遺構は見つかっていませんが、旧石器時代の項で挙げた、牧ヶ原遺跡〔伊那(竜西)地域〕があり、表面に文様のない無文の土器片が1点出土しています。伊勢並遺跡〔伊那(竜西)地域〕からも数点の土器片が出土しており、人々はこの地に住み続けていたことがわかります。

縄文時代早期(約1万年前～6千年前)になると、平均気温は現在よりも2、3度低いものの、落葉広葉樹林帯が出現し、市内の遺跡数も増加します。この時期の伊那谷を含む中部高地を代表する土器として、棒につけた刻み目を回転させて押し付け、山形や楕円形の文様をつける押型文土器があります。三ツ木遺跡〔富県地域〕からは、底部が尖ったほぼ完形の押型文土器が出土しています。縄文時代の古い時期の土器が完形で出土することはとても珍しく、全国的に注目されました。また、宮の原遺跡〔高遠町地域〕からは長野県内でも数少ない早期末の住居址2軒が見つっています。東海地方の特徴が見られる土器も出土していることから、縄文時代早期から前期へと気候の温暖化に伴い、東海地方から中部高地へ人々の移動があったことを物語ります。

縄文時代前期(約6千年前～5千年前)には、さらに温暖化が進み、狩猟採集の生活が安定し、全国的に大集落が作られるようになります。伊那市に隣接する宮田村の中越遺跡では、前期前半の住居址が200軒以上も見つかり非常に有名です。市内にはこのような大規模集落は見つかっていませんが、多くの土器片を伴う住居址がいくつも見られます。

縄文時代中期(約5千年前～4千年前)の平均気温は現在よりも2度ほど高く、自然が豊かな伊那谷や八ヶ岳周辺など今の中部高地一帯は、当時の日本でも人口が多い場所でした。日本全体の人口が26万人だった頃、4分の1以上の7万人がこの一帯に暮らしていました。そのため、複雑な文様が付く立派な土器がたくさん作られる縄文文化が花開いた場所となりました。

市の史跡に指定されている月見松遺跡〔伊那(竜西)地域〕では、縄文時代中期初頭から後葉にかけての住居址が107軒も見つかり、長い間続いた大きな集落として重要な遺跡です。また、縄文時代中期中葉の28号住居址からは県宝に指定されている「顔面把手付大深鉢」も出土しており、その他の月見松遺跡独特の文様や形の土器とともに注目されています。



おしがたもんどき みつぎいせき  
押型文土器 三ツ木遺跡



がんめんとって つきおふかばち  
顔面把手付大深鉢の出土状況  
つきみまついせき  
月見松遺跡

御殿場遺跡〔富県地域〕は県指定の史跡です。縄文時代中期の住居址が22軒見つかかり、そのうちの6軒の住居について詳細な発掘調査が行われました。縄文時代中期後葉の12号住居址の床面からは、国指定重要文化財「顔面付釣手形土器」が完全な状態で出土しました。女神の顔がついた土器は長野県の中南部や山梨県を中心に、祀りに使うものとして作られました。また、釣手土器はアーチ状の飾りが付いた鉢形の土器で、集落遺跡から稀にしか出土しない火の祀りに使われた土器と考えられています。「顔」と「釣手土器」という特別な2つの要素を持つ「顔面付釣手形土器」は、火を女神が司るという、当時の人々の世界観や信仰を表している土器なのです。



御殿場遺跡 復元住居

平成30年(2018年)には、縄文時代中期中葉から後期にかけての土器10点が「信州の特色ある縄文土器」として新たに長野県宝に指定されました。指定された土器の多くは、上伊那・松本・諏訪地方に分布する「唐草文系土器」と呼ばれる、土器中央に大きく美しい唐草模様を装飾するものです。当時の社会の繁栄を示す縄文文化の集大成ともいえる土器が、この時期に作られました。



出土したばかりの顔面付釣手形土器

しかし、縄文時代中期後葉の終わり頃から、調査によって見つかる集落遺跡数、住居址の軒数がともに減っているため、この辺り一帯の人口が激減したと考えられています。これには当時の気候が関係しており、草創期から中期後葉にかけて、次第に暖かくなった気候が、中期後葉の終わり頃、再び寒冷化に向かったためです。それまで、美しく力強い唐草模様が付けられていた「唐草文系土器」も、この頃にはほとんど装飾されず、へらで無造作に付けられた線などが文様となっています。すでにこの時期には、土器製作に生活の力を注ぐ余裕がなかったと考えられます。



唐草文系土器  
島崎遺跡出土  
(長野県宝)

縄文時代後期(約4千年前～3千年前)、晩期(約3千年前～2千3百年前)には、さらに寒冷化が進み、人口が日本全体で7万5千人ほどに激減してしまいます。市内でも、後期・晩期の遺跡はほとんど見られません。

縄文時代後期の百駄刈遺跡〔西春近地域〕では、人頭大から拳大の石が集められ、その中に6本の石棒が立てられている配石遺構が見つかりました。この配石遺構は、何年もかけて少しずつ広げられていった形跡が見られます。配石遺構を真ん中に囲むように5軒の住居が建てられているため、この遺構が集落に住む人々の大切な祈りの場であったことがわかります。住居址などからは大量の土器片のほか、仮面土偶の顔の部分や石棒など祀りに使う道具が何点も出土しています。縄文時代後期、寒冷化とともに全国的に祈りの場や道具が多く作られるようになってきます。百駄刈遺跡からは、当時の人々が環境の悪化と戦った苦しい生活が伝わってくるようです。



文様がほとんどなくなった唐草文系土器

縄文時代晩期の遺跡が少ない中部高地において、野口遺跡〔手良地域〕からは、非常に珍しい石槨状墳墓（石積みで部屋を作った墓）が見つっています。東西4.2m、南北2.5m、深さ60cmの長方形の墓の中には、7か所に人骨の集められた場所があり、全部で31個体が葬られていました。全ての人骨に焼かれた痕跡があり、一度土葬した遺体を掘り出し、骨を洗い、さらに焼いたうえで何体かのグループに分けて埋葬した様子が分かりました。また副葬品とみられる土器片や石器・骨製品も大量に出土しています。そして顎の骨の分析からは、成人儀礼としての風習と考えられる「抜歯」が行われていたことも分かりました。

縄文時代晩期の遺跡としては、ほかに末広六道原遺跡〔美篁地域〕があり、ここからは東海地方からもたらされた条痕文をもつ土器片が多く出土しています。伊那市の縄文時代は、気候の温暖化とともに隆盛し、寒冷化とともに衰退していきますが、土器に見られるような東海地方の人々との継続的な関係があり、次の弥生時代へと向かっていったと考えられます。



配石遺構 百駄刈遺跡



人骨 野口遺跡出土

### 4-3 弥生時代

中国大陸から伝わった稲作を行い、金属器を使用する弥生文化は、まず北九州で定着した後、次第に日本中に広がっていきました。しかし、この最初に伝わった弥生文化は、土地によっては全く定着せず、長野県内でもこの時期の遺跡数は十数か所ほどしかありません。

その内の1つに、<sup>あらがみいせき</sup>荒神遺跡〔伊那(竜東)地域〕が挙げられます。弥生時代前期末～中期初頭と考えられる大型の袋状土坑3基が見つかり、その1つから、弥生文化が始まり、稲作とともに九州地方から広がった「遠賀川系土器」の壺が出土しました。また、東海地方で作られた「水神平系土器」も他の土坑から見つかっています。弥生文化が九州から東海地方を経由して、天竜川沿いに北上し、伊那谷から諏訪盆地・松本平へ伝わった事がわかります。

弥生時代中期には、東日本でも広い範囲で弥生文化が浸透し、本格的に水田耕作が始まります。上伊那では天竜川右岸、自然堤防の後背湿地に広がる<sup>みのわいせき</sup>箕輪遺跡〔箕輪町、南箕輪村〕で、水路や田の畔、通路を構築するための柵とした、総延長約4kmの木杭の列が見つかっています。水田跡はまだ見つかっていませんが、当時の水田耕作はこのような河川に隣接する低湿地帯で営まれていたことが分かる貴重な発見となりました。市内ではこの頃の様子が見える遺跡がありませんが、段丘の<sup>とつたんぶ</sup>突端部にある<sup>なかわらいせき</sup>中村遺跡〔西春近地域〕では、中期初頭から後半にかけての土器片が多く出土しています。段丘端部に集落を営み、そのすぐ下の低湿地で水田耕作を行っていた当時の生活がうかがえます。

弥生時代後期になると、市内でも集落遺跡が見られるようになります。市内に82か所ある弥生時代の遺跡ですが、これまで弥生時代の遺跡の発掘事例も少ない事もあり、遺構も出土品もこの時期のものが大半を占めます。<sup>みやたいらいせき</sup>宮の平遺跡〔手良地域〕は、山麓の最も奥まった位置にあります。6軒の住居址が見つかりました。遺跡のすぐ北には天竜川支流の<sup>たなざわがわ</sup>棚沢川が流れており、近辺で水田の遺跡が見つかる可能性が高く、弥生時代後期ならではの新しく開かれた小規模集落の在り方がわかります。しかし、このような<sup>しょうかせん</sup>小河川に沿ってできた小規模集落は長く継続せず、すぐに断絶してしまうのが特徴です。氾濫しやすい河川のそばで暮らすため、水田や居住地が水害を受けると別の土地に移動して、新しく集落を作ったためです。

一方、それとは対照的に、恵まれた自然条件のもと、西春近地域の<sup>とりいだ</sup>鳥井田、<sup>よこぶき</sup>横吹、<sup>じょうこし</sup>城の腰のように3つの遺跡にまたがる、規模の大きな集落遺跡も形成されました。ここでは、500m四方の中に、弥生時代後期の住居址24軒が発見されました。この3遺跡はそれぞれ一部分が調査されたのみで、全面的に調査されれば1つの大集落になると考えられています。この集落遺跡のすぐ南側は<sup>だんきゅうがい</sup>段丘崖となっており、そこからの<sup>ゆうすい</sup>湧水により広大な湿地帯が形成され、弥生時代後期を通して、安定した生産基盤



おんががわけいどき つぼ  
遠賀川系土器の壺  
あらがみいせき  
荒神遺跡出土



たてあなじゅうきよ とりいだいせき  
竪穴住居 鳥井田遺跡



弥生土器 鳥井田遺跡出土

が築けたと考えられています。住居址の1つからは鉄片が出土しており、弥生時代後期には伊那市域で鉄器が確実に用いられていたことが分かります。

この他にも、中村遺跡〔西春近地域〕では、6軒の住居址とそれを丸く囲むように幅2m、深さ1.5mの環濠<sup>かんごう</sup>がある集落が見つっています。一番大きな住居址からは、最も多くの土器や石器が出土したほか、ヒスイ製の勾玉<sup>まがたま</sup>が1点出土しています。水田耕作により人々の暮らしは豊かになる一方で、財産などをめぐり争いが起こるようになったため、集落や財産をこのような環濠で守る必要が出てきたと考えられます。



ヒスイ製勾玉<sup>まがたま</sup> 中村遺跡出土<sup>なかむらいせき</sup>

## コラム

### 伊那の地に初めて稲作を伝えた人達の足跡、「荒神遺跡」<sup>あらがみいせき</sup>

平成30年(2018年)、国道153号伊那バイパス建設工事に伴う調査で、荒神遺跡〔伊那(竜東)地域〕から、弥生時代前期末～中期初頭と考えられる大型の袋状土坑3基が見つかり、その土坑の1つから、「遠賀川系土器」の壺が見つかりました。

大陸から北九州の遠賀川流域に稲作文化が伝わり、そこで作られていた土器の形とともに、稲作は日本中に広がっていきました。胴部が丸く大きく突き出した壺は、弥生文化の始まりと広がりを示す土器なのです。袋状土坑は西日本では貯蔵庫として使われるものですが、ここではおそらく墓として掘られたもので、「遠賀川系土器」の壺も完形ではないため、割れた物を副葬品として納めたものと考えられます。「遠賀川系土器」は長野県内でも13遺跡でしか出土しておらず、しかも小片が多いので、壺全体の形が分かる今回の出土品は、非常に貴重な資料となります。また、「遠賀川系土器」と一緒に出土する東海地方の「水神平系土器」も土坑から出土しており、稲作文化が天竜川を遡<sup>さかのぼ</sup>ってこの地に入り、さらに北へと伝播<sup>でんぱ</sup>していったことが明確となりました。



荒神遺跡の調査の様子



袋状土坑<sup>ふくろじょうどこう</sup>より出土した  
遠賀川系土器の壺

#### 4-4 古墳時代

3世紀後半から8世紀初頭にかけて、土を高く盛り上げて造った墳丘をもつ墓、古墳が造られた時代が古墳時代です。

伊那市域には、昭和36年(1961年)の時点では243基もの古墳があったとされています。上伊那郡全体で当時407基の古墳があったとされるので、6割の古墳が伊那市域に集中していました。しかしその後、開発などで古墳の破壊が進んでしまい、現在伊那市には87基の古墳(前方後円墳1基、円墳84基、方墳2基)が、上伊那郡では176基の古墳が残されているのみです。『伊那市史』(昭和58年(1983年))では、市内の古墳は全て古墳時代後期(6世紀代)後半以降の築造と推定されていましたが、実際の築造時期は不明でした。

東春近地域にある老松場古墳群では、平成29年(2017年)から6回、発掘調査が行われました。前方後円墳である老松場1号墳は、墳丘の形と粘土槨(棺を粘土で覆った埋葬施設)が見つかったことから、築造年代が古墳時代中期前半頃(5世紀前半頃)とわかりました。

老松場1号墳の隣にある円墳、2号墳の発掘調査では、出土した土器から古墳時代中期中葉から後葉(5世紀中葉～後葉)であることがわかりました。古墳時代後期(6世紀代)以降、古墳の埋葬施設として横穴式石室が用いられるようになります。しかし、天竜川左岸の段丘上にある古墳のほとんどは墳丘の高さが2m未満で、横穴式石室を造るには高さが足りません。老松場古墳群が古墳時代中期前半から造られ始めたことから、天竜川左岸の古墳群も古墳時代中期前半以降に造られたものが多いと考えられます。

伊那市には、古墳時代の集落遺跡が14か所あります。最も多く古墳が集中する旧伊那市域で、天竜川左岸で8か所、天竜川右岸で1か所が集落遺跡とされているのみで、住居址もわずかに4遺跡で6軒しか見つかっていません。しかし、古墳群の立地から集落遺跡があったと考えられる場所が、他にも分かってきました。円墳はある一定の地域を束ねる力を持った首長(今で言えば町長、村長クラス)の墓であり、自らが治めていた集落や生産域がよく見える場所に築造します。伊那市域の古墳の立地を見ると、老松場古墳群がある東春近地域では、低位段丘上の端部に北から南へと41基の古墳が並んでおり、段丘直下のやや高い平坦面に現在の集落が、少し離れた場所に天竜川の湿地帯が望めます。三峰川以北、伊那(竜東)地域の上牧や福島も同様に、段丘端部の南北に32基の古墳が並び古墳群の直下に現在の集落があります。市の遺跡地図では古墳時代の集落遺跡とされていない段丘直下のやや高い平坦面ですが、ここに古墳群を築造した人々の集落遺跡がある可能性が高いのです。現在の住宅地と古墳時代の集落の範囲が重なっているために、遺跡が発見できていないのかもしれませんが。そして、天竜川の氾濫原であ



昭和47年(1972年)に  
発掘調査された名廻東古墳



上牧古墳群の古墳  
天竜川左岸には低墳丘墳が多い



老松場古墳群上空から  
天竜川西側の段丘を望む

る湿地帯には、現在と同じように水田が広がっていたことでしょう。

次に前方後円墳である老松場1号墳の立地を見てみます。前方後円墳は、今の県知事クラスの人物のお墓にあたり、埋葬されたのは現在の市域よりさらに広い範囲を治めていた首長です。古墳から望める天竜川右岸の段丘上には、ヤマト王権が整備した交通路である古東山道ことうさんどうがありました。主要道路であった古東山道や集落があった天竜川右岸の段丘からも良く見えるように意識して造られました。老松場1号墳の造られた時期は、長野県内の前方後円墳の造営地が、長野盆地から伊那谷南部に移った時期です。その時期に、長野盆地と伊那谷南部のちょうど真ん中に位置する伊那市に、前方後円墳が造られたということになり、長野県の古墳時代を考える上で鍵となる古墳となっています。

## コラム

### 老松場古墳群、小学生が発見した前方後円墳

#### —最近の調査成果でわかってきた伊那市の古墳時代—

平成27年(2015年)、地元有志と東春近小学校の児童によって木々や藪やぶに覆われていた老松場古墳群が公園として整備されました。古墳について学んでいた東春近小学校の児童から、円墳または双円墳そうえんふんとされている老松場古墳群の1号墳は、前方後円墳なのではないかとの疑問が出されました。児童らが学芸員の指導を受けながら行った測定の結果、前方後円墳とわかり、全国の古墳研究者を驚かせました。その後始まった市教育委員会と関西大学文学部考古学研究室による測量・発掘調査により前方後円墳であることが確認され、築造時期は古墳時代中期前半頃(5世紀前半頃)の可能性が高まりました。また、築造当初は葺石ふきいしで装飾されていたことも分かりました。上伊那地域の前方後円墳は、箕輪町松島に所在する松島王墓古墳まつしまおうはかこふんのみでしたが、2例目の発見となり、南信地方では最も古い前方後円墳となりました。

また、令和3年(2021年)、令和5年(2023年)には、老松場1号墳の隣にある円墳、老松場2号墳を発掘調査しました。その結果、出土した土器から築造年代が5世紀半ばから5世紀末である事がわかりました。これまで市内の古墳は全て6世紀後半(古墳時代後期)以降の築造とされていましたが、全ての古墳について築造時期の見直しが必要となってきました。

また、令和元年(2019年)、令和4年(2022年)に行った、西春近南小学校遺跡にしはるちかみなみしょうがっこう [西春近地域] の発掘調査では、老松場1号墳とほぼ同時期、4世紀末から5世紀半ばの住居址3軒が見つかりました。実はこれまで古墳時代の集落遺跡があるとされていなかった天竜川右岸にも、人々が暮らしていたのです。



測量をする児童



老松場1号墳発掘の様子



西春近南小学校遺跡の

古墳時代の住居址

## 4-5 奈良・平安時代

奈良時代は和銅3年(710年)から平城京(現在の奈良市)に都が置かれた時代、平安時代は延暦13年(794年)から平安京(現在の京都市)に都が置かれた時代です。しかし、それ以前の7世紀後半より、当時の日本は中国で成立した律令を取り入れ、都を中心とする中央集権的な国家体制となっていました。

奈良県の藤原京(持統8年(694年)~和銅3年(710年))から発掘された木簡の中には、「科野国伊奈評大贄」と書かれたものがあります。この頃には全国60あまりの国の1つとして「科野国」が成立し、天竜川流域には現在の上伊那と下伊那を合わせた「伊奈評」があって、ここから都へ税の貢納がされていました。

大宝元年(701年)制定の大宝律令では、「国評里制」が改められ、「国郡里制」となります。全国は五畿七道に区分され、その下に国・郡・里(後に郷に改められる)が置かれ、信濃国には伊那郡、諏訪郡を始め10の郡が置かれました。平安時代中期に書かれた『和名類聚抄』には、伊那周辺とみられる3つの郷が載っています。

「伊那郡 福智郷」は富県地域の南福地・北福地・貝沼を中心とした天竜川の東側、北は三峰川、南は小渋川までの範囲とされ、「伊那郡 小村郷」は天竜川西側の小沢川以南、西春近、宮田村一带と考えられています。小村郷から都へは布が納められており、「信濃国伊那郡小村郷交易布一段、天平十年十月」と書かれた布袋が正倉院に現存しています。「諏訪郡 豆良郷」は現在の手良地域を中心とする郷で、天竜川の東側、三峰川以北の地で、東は藤沢川までの範囲といわれています。

各郷、どの中心地にも弥生時代の遺跡や古墳時代の古墳があり、その頃から続く集落や生産基盤が奈良・平安時代に受け継がれ、豊かな地域が広がっていたと考えられます。

都と各国を結んだ東山道は官道で、近江の勢多駅(現在の滋賀県大津市)を起点とし、美濃(現在の岐阜県南部)から信濃へ入り、上野(現在の群馬県)を抜けて最終的に陸奥の国府(現在の宮城県多賀城市)へつながる道でした。東山道には一定の距離ごとに「駅」が置かれ、公用に使う馬が配備されていました。平安時代初期の宮中行事や制度などを記した『延喜式』には、信濃国に置かれた15の駅名が見え、上伊那を通る各駅もおおよその位置が分かっています。伊那市域に駅はありませんが、南北にある駅の場所から、天竜川の西側を通っていたと考えられます。東山道以前には、「古東山道」と呼ばれる古墳時代のヤマト王権が東北地方の支配を目的として整備した道がありましたが、こうした古くからの重要な道の一部を利用して、東山道が整備されたと考えられています。

この時代、交通・運輸や軍事の点から馬は非常に重要であり、その飼育が全国各地で積極的に行われました。『延喜式』には、朝廷用の馬を飼育する「御牧」が長野県内に16あったことが記されています。上伊那には平井豆牧(現在の辰野町平出)、笠原牧(現在の伊那市美篤笠原)、宮処牧(現在の辰野町伊那富、宮所)の3つが置かれていました。美篤地域の笠原には、現在でも「駒石」、「駒形」、「ませぐち」、「牧垣内」などの牧に関係あると思われる地名が残っています。

奈良時代以降、有力貴族や寺社の土地所有が全国に広がりましたが、平安時代後期には、伊那周辺にも諏訪上下社領の「藤沢黒河内」や近衛基道の所領(殿下渡領)「露原庄」、左馬御寮領の



みなものしたごう 源順撰『倭名類聚抄』  
(寛文3年(1663年)村上勤兵衛出版)  
国立国会図書館  
デジタルコレクションより

「笠原御牧」、「春近領」といった荘園があったことが知られています。『古今著聞集』には9世紀の長谷にまつわる説話が収められています。鷹飼の依田豊平が京都で天皇秘蔵の鷹を飼いならし、名鷹に育て上げたことから、「ひちの郡」（長谷非持）に土地と屋敷を賜ったという話です。後に依田豊平は、荘園の役人（荘官）を意味する「検校」という言葉を冠して「ひちの検校豊平」と呼ばれています。当時の伊那も例外なく荘園制の下にあり、人々は依田豊平などそれぞれの領主や荘官の支配を受けながら暮らしていたのです。

市内には奈良時代の遺跡が32か所、平安時代の遺跡が150か所あります。当時の遺跡から出土した考古資料を手掛かりに、人々の暮らしをみていくと、これらの遺跡の立地は、段丘端部や小河川沿い、山際があり、弥生時代、古墳時代の集落と重なる所が多く、大河川流域の湿地帯や小河川沿いの山際で水田耕作を行っていたと考えられます。

菖蒲沢遺跡〔西春近地域〕は奈良・平安時代の集落遺跡です。中央自動車道建設の際には、奈良時代の竪穴住居が10軒見つかりました。その中の1つは、他より2倍近く大きなもので、その一番大きな住居を取り囲むように集落が営まれていました。

勸前遺跡〔伊那(竜西)地域〕は、奈良時代末から平安時代前期(8世紀末～9世紀中頃)まで続く集落遺跡です。上伊那では珍しい掘立柱建物が多い遺跡で、これまでに調査された部分だけで竪穴建物8軒、掘立柱建物34棟が見つっています。遺跡の南半分は、豪族の居住空間となっており、一般的な竪穴建物の4倍の面積がある鍛冶場であった大型の竪穴建物や、それをコの字型に囲む掘立柱建物群がありました。その北側には、地方官衙(出先の役所)の役割をもつ、大型の掘立柱建物が方向をそろえて一列に並ぶ建物群がありました。この遺跡から西へ1kmの場所に東山道が南北に走り、その駅と駅の間地点にも位置しています。この時期の地方の豪族が鉄製品や特産品である麻織物などを生産しながら、地方の役人を務めていた事が分かる重要な遺跡です。

福島遺跡〔伊那(竜東)地域〕は、平安時代の諏訪郡豆良郷の集落の1つとみられる遺跡です。天竜川の東、棚沢川の北にある段丘端部にあり、市内では他に類を見ない平安時代の大規模集落で、これまでの調査で住居址が約30軒見つかりました。1つの集落に大小の竪穴住居があり、大きな住居は下位の役人の家であったとみられ、大量の貯蔵用土器や官人が身につける革帯(ベルト)の鍔(飾り金具)、石帯(ベルトの飾り)などが見つっています。この頃には、農民の中から生まれた富裕な者が政治に関わり、人々の間に主従関係が生まれていたと考えられます。

このほか市内の遺跡からは、市指定文化財の和同開珎(下手良中原遺跡〔手良地域〕)、緑釉陶器皿(金鑄場遺跡〔西箕輪地域〕)、経筒と和鏡(下牧経塚〔西春近地域〕)が出土しています。



検校塚(市指定文化財)



和同開珎  
下手良中原遺跡出土  
(市指定文化財)



大型の掘立柱建物群 勸前遺跡



緑釉陶器皿 金鑄場遺跡出土  
(市指定文化財)

緑釉陶器皿が出土した西箕輪地域の金鑄場遺跡では、平安時代の製鉄遺構が見つかっており、ここで鉄生産が行われていたこと、また鉄を背景とした経済力によって、当時希少であった緑釉陶器を所有できる裕福な人物がいたことがわかりました。

金鑄場遺跡のある西箕輪地域には、平安時代に開かれた天台宗の古刹仲仙寺があり、古くから仏教との関わりが深い地域ですが、この西箕輪地域と西春近地域には、仏教の経典や仏具などを埋めて供養した「経塚」という地名がいくつもあります。西春近地域の下牧経塚からは、複数の経筒や和鏡、刀子が出土しており、平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけて、伊那においても仏教信仰が広がりを見せ、人々の間に浸透していったことがうかがえます。



きょうづつ しもまききょうづか  
経筒 下牧経塚出土  
(市指定文化財)

## コラム

### 平安時代前期の豪族の暮らしがわかった「勸前遺跡」

勸前遺跡は、平安時代前期の豪族居宅と地方官衙(役所)と考えられる建物群が発見された上伊那地域でも珍しい遺跡です。

南側の建物群の中心となっている竪穴建物は、一辺が10mもある(一般の竪穴建物は一辺が4~5m)大型の竪穴建物です。建物内で鍛冶を行っていた様子が見られ、鉄鍬や小刀、牽引き金具(麻皮剥ぎ器)など鉄製品がたくさん出土しました。また、「生」という字が書かれた土器や、集落の長を表す「家長」と書かれた土器など、墨書土器がたくさん出土しました。南側の建物群は、この集落と周辺一帯を治めていた豪族の鉄器生産拠点で、この建物を取り囲む建物群が居宅や倉庫だったのでしょう。

北側の建物群の中心にある掘立柱建物は、建物を支える柱の数が16本もある(一般的な掘立柱建物は6本)大型建物で、上伊那地域ではこれほどの規模の掘立柱建物が見つかるのは初めてです。この建物を中心に、南北に2棟ずつ掘立柱建物が一列に並んでいました。これらの掘立柱建物の柱の穴は長さ1m、幅70cmの長方形の穴で、一般的な直径50cmの円形の柱の穴とは異なる形をしていました。この長方形の柱穴は、官衙(役所)や寺院など特別な建物に用いられる掘り方で、一列に並んだ掘立柱建物群は、地方の役所としての役割を果たしていたものと考えられます。

平安時代前期の地方の豪族が、居住空間に隣り合った場所に役所的な建物を持ち、地方の役人も務めていたことが分かる重要な遺跡となりました。



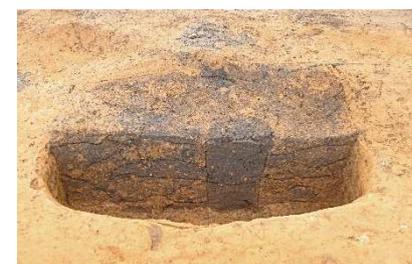
大型の竪穴建物



文字が書かれた土器



大型の掘立柱建物



長方形の柱穴  
(手前半分を掘った様子)

## 4-6 鎌倉・室町時代

鎌倉時代に関わる西春近の伝承に、<sup>いぬぼうまる</sup>犬房丸伝説があります。富士の巻狩りで父の仇討を遂げた曾我兄弟の物語は有名ですが、この時曾我兄弟に殺された鎌倉幕府の有力御家人、工藤祐経の息子が犬房丸です。源頼朝の怒りを買って伊那に流罪となった犬房丸は、西春近地域の<sup>こいで</sup>小出で生涯を終えたと伝えられています。犬房丸伝説の真偽は定かではありませんが、鎌倉時代初期の春近領では、鎌倉幕府の御家人で工藤氏一族の<sup>こいで</sup>小井弓氏が勢力をもっており、犬房丸が小井弓氏の影響下で過ごしたとされるこの伝承は、幕府と伊那の氏族の関係をj知る上で興味深い話です。



<sup>いぬぼうまる</sup>  
犬房丸の墓

また、伊那の鎌倉時代を語る上で、隣接する諏訪との関係は欠かせません。高遠、長谷一円にあたる2つの荘園「黒河内庄」と「藤沢庄」は、源頼朝によって社領として諏訪社上社（現在の諏訪大社上社）に寄進された地域ですが、この地域の領主には藤沢氏や高遠氏といった諏訪氏の一族が就いています。また、諏訪社の造営や神事の度に、黒河内庄や藤沢庄の村々ばかりでなく、周辺の村々にまで人足の負担が求められるなど、諏訪社の影響を大きく受けた土地でした。

南北朝時代の伊那は、南朝と関わりが深い地域でもありました。<sup>ごだいごてんのう</sup>後醍醐天皇の第八皇子、<sup>むねよししん</sup>宗良親王は、足利尊氏に敗れた南朝方の再興を図るため、<sup>おおがわら</sup>大河原（現在の<sup>おおしかむら</sup>下伊那郡大鹿村）に拠点を置き、地域の有力者の力を借り、中央構造線の影響でできた谷筋（後の<sup>あきはかいどう</sup>秋葉街道）をj行き来しながら活発に活動しました。宗良親王に関わる伝承を持つ史跡が長谷地域、高遠町地域には多く遺されています。

宗良親王も利用していた、長谷から高遠町山室、<sup>やまむろ</sup>荊口、<sup>しばら</sup>芝平を抜けて諏訪盆地に至る道は、「<sup>ほっけみち</sup>法華道」と呼ばれ、平安時代に<sup>さいしやう</sup>最澄が法華信仰（天台宗）を伝えた道です。室町時代には日蓮宗の布教にも使われました。街道沿いにある<sup>おんしやうじ</sup>遠照寺の<sup>じしやかどう</sup>釈迦堂は、室町時代後期に建てられた建物で、内部の<sup>たほうしやうどう</sup>多宝小塔とともに国の重要文化財に指定されています。これらは、日蓮宗と深いつながりがあり、優れた技術を持った大工集団である池上一門の職人が建てたものです。彼らは高遠、長谷周辺を拠点に広域に活動していましたが、後に<sup>かい</sup>甲斐（現在の山梨県）の武田氏に抱えられ、技術面から戦国大名をサポートするようになっていきました。



<sup>おんしやうじしやかどう</sup>  
遠照寺釈迦堂  
(国指定重要文化財)

伊那周辺は長野県内でも<sup>じやうかんあと</sup>城館跡が多いことで知られています。早いものは鎌倉時代、大半は室町時代から戦国時代に築かれたものとみられ、地域の有力者の館跡から、戦に備えて築かれた山城や<sup>のろしだい</sup>狼煙台に至るまで、様々な城館跡があります。

15世紀から16世紀にかけて、伊那市域には比較的狭い地域ごとに領主が存在し、それぞれに上下関係や協力関係の秩序を保ちながら、時に大きな勢力に向かう際には、地域が一体となった行動をとっていました。<sup>おうえい</sup>応永7年（1400年）の<sup>おおとうがっせん</sup>大塔合戦に参加した「藤沢」・「笠原」・「大島」・「春近の人々」・「山田」・「小



<sup>おんしやうじしやかどう</sup>  
遠照寺釈迦堂内の多宝小塔  
(国指定重要文化財)

井弓・「沢堂」や、永享12年(1440年)の結城合戦に参加した「藤沢殿」・「甲斐沼殿」・「小井弓殿」、武田信玄(晴信)が上伊那へ侵攻した際に最後まで抵抗した「溝口」・「黒河内」・「伊奈部」・「殿島」をはじめ、他にも「市瀬」・「浦野」・「御園」・「福島」といった多くの地侍が伊那周辺におり、それぞれに城や館を利用していたと考えられます。

市内では特に富県地域に城が多く、字名ごとに1つ程度、城跡と伝えられる場所がありますが、これらも戦に備えて築かれた城ではなく、地域の有力者の居館跡であるとみられています。



富県の城館跡群の1つ 竹松城

## 4-7 戦国・安土桃山時代

戦国時代、信濃へ攻め入った甲斐の武田信玄は、天文11年(1542年)に諏訪を手に入れると、続いて高遠氏を攻め、天文14年(1545年)に高遠を手中に収めました。高遠は諏訪から伊那谷へ抜ける交通の要衝で、駿河(現在の静岡県東部)や遠江(現在の静岡県西部)に進出するための重要な地点であったことから、信玄は天文16年(1547年)に高遠城を修築し、城主に武田(諏訪)勝頼や武田信廉など、自分に近い人物を置いて伊那一带を治めさせました。

信玄が死去した後、武田家を継いだのは武田勝頼でしたが、長篠の戦いで織田信長に敗れると、武田家は急速に勢力を失っていきました。天正10年(1582年)、織田信長は武田家を滅ぼすため、嫡男の信忠を大将として、尾張(現在の愛知県西部)から信濃へ侵攻してきました。

当時の高遠城主は信玄の五男、仁科盛信(信盛ともいわれる)で、織田の大軍を相手に奮戦しましたが、高遠城は落城し、盛信も自害しました。この戦いは「高遠城の戦い」として後世まで語り継がれ、この時に織田軍が持ってきた梵鐘、鰐口、陣太鼓や織田信忠が陣を敷いたと伝えられる「一夜の城」、混乱から地域を守ろうとした村人たちが織田軍から入手した「禁制」などが今に伝えられています。

武田氏滅亡から3か月後、本能寺の変によって織田信長が命を落とすと、領主が不在となった信濃国は混乱に陥りました。伊那でも高遠城や周辺領地をめぐる争いが起こりましたが、最終的に高遠城を押さえ、伊那周辺を手に入れたのは、武田家の旧臣、保科正直でした。その後、正直は徳川家康の家臣となりましたが、豊臣秀吉の命により関東移封となった家康に従って、天正18年(1590年)に下総国(現在の千葉県)へ移りました。

秀吉政権の下、伊那周辺は毛利秀頼や京極高知の領地となりましたが、高遠城に城主は置かれず、代官が派遣される形で統治されました。秀吉が亡くなり、関ヶ原の戦いを経て徳川の世となると、再び保科氏が高遠城に戻ることであり、かつて城主であった保科正直の子、正光が高遠城主に就きました。

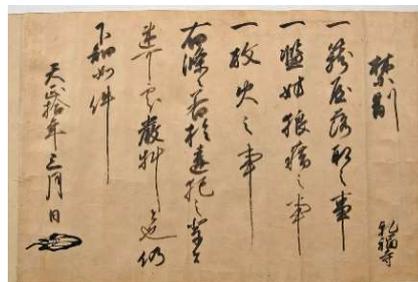
地域が混乱に陥った安土桃山時代の末期、本能寺の変からわずか20年余りの間に、目まぐるしく領主が替わる中でも、人々は時勢を読みながらたくましく生き抜き、江戸時代を迎えたのです。



仁科五郎盛信肖像



一夜の城



建福寺文書 織田信忠禁制  
(市指定文化財)

## コラム

## 発掘調査で見つかった一夜の城の堀

平成23年度(2011年度)に行われた一夜の城の発掘調査では、南側の土塁の外側に、深さ2m、幅5m以上もの空堀があることが確認されました。一般的に陣城には堀はありません。堀があったことや出土品の年代から、地元有力者の居館を織田軍が占拠し、陣城として利用した可能性が指摘されています。



## 4-8 江戸時代

戦乱の世が終わり、慶長 8 年(1603 年)に徳川家康が江戸幕府を開きましたが、徳川政権の下、伊那周辺は高遠城主が治める高遠領(高遠藩)と幕府領(天領)に分けられました。現在の手良、福島、西箕輪は幕府領で、一部が箕輪領に入った時期もありましたが、代官支配地、旗本知行所、預り地が様々に入り組み、隣村同士で支配者が異なるという状況も生まれていました。

高遠領を治めた大名は保科氏、鳥居氏、内藤氏の 3 家です。当初の領地は 2 万 5 千石でしたが、度々加増され、内藤氏が入封した元禄 4 年(1691 年)には、3 万 3 千石となりました。その頃の高遠藩の領域を現在の市町村に置き換えると、前述の幕府領を除く伊那市域、宮田村、駒ヶ根市の一部(東伊那、中沢)、辰野町の一部、塩尻市洗馬、東筑摩郡朝日村の一部です。

江戸時代の高遠は、政治の中心地であるばかりでなく、多くの人や物が集まる経済・文化の中心地でもありました。もともと鉾持神社や建福寺の門前町であった西高遠は、江戸時代になると城下町として発展し、伊那谷と諏訪を結ぶ杖突街道(金沢街道)(※)の宿駅でもあったことから、非常に賑わいました。三峰川右岸の狭い範囲に 10 の町が分けられ、様々な商家や職人が軒を連ねました。弘化 2 年(1845 年)の 10 町の人口は 3,003 人で、幕末の文久 3 年(1863 年)に三峰川左岸に 2 つの新町が建設された後は、さらに人口が増えました。



高遠城下の様子 『高藩探勝』(市指定文化財)より

江戸時代の伊那市域には遠隔地を結ぶいくつかの街道が通っていましたが、杖突街道(金沢街道)と直交する形で、伊那谷を南北に走っていたのが伊那街道です。

伊那街道は塩尻(現在の塩尻市)から三河(現在の愛知県東部)へ抜ける街道で、中山道の脇往還でした。荷物を輸送する民間業者「中馬」が盛んに往来したことから、別名「中馬街道」とも呼ばれました。目的地間を早く安く行き来する中馬は、地場産業の振興や商品経済の発展に一役買い、地域の流通経済を支えました。



伊那部宿酒屋旧井澤家住宅  
(市指定文化財)

南北朝時代に宗良親王が盛んに利用していた中央構造線の谷を南北に通る道(現在の国道 152 号)は、江戸時代になると信仰の道「秋葉街道」として多くの人が行き来するようになりました。火災が多かった江戸時代、火伏の神を祀った秋葉神社(現在の静岡県浜松市)を参詣する「秋葉参り」が全国的に流行したためです。沿線には、当時の秋葉信仰を物語る石造物などが、現在も遺されています。

街道の発達、文化の交流にもつながりましたが、秋葉街道を通して入ってきた文化の 1 つに歌舞伎芝居があります。娯楽が少なかった江戸時代、村人たちが旅芸人から歌舞伎を教わり、自分たちで演じるようになったのが農村歌舞伎で、長谷の中尾では「中尾歌舞伎」として現在も受け継がれています。

江戸時代以降、街道沿いや集落の入口には、道標や道祖神、馬頭観音、庚申塔といった石造物が

数多く造られました。これらの石造物を造ったのが、「高遠石工」とよばれる職人たちです。

高い技術が評判を呼んだ高遠石工は、伊那周辺だけでなく全国各地へ出かけ、石造物を刻みました。農閑期の副業として旅稼ぎをする者もいましたが、当時の石工はほかの職人と比べて給金がよく、仕事が豊富だったこともあり、専業の石工として旅稼ぎに出る者が多くいました。江戸時代末期、幕府が諸外国の脅威に備え、品川御台場を築いた際にも、多くの高遠石工が工事に関わっています。

江戸時代、長谷地域の三峰川源流に近い山々は、「御立山」と呼ばれ、高遠藩によって厳しく管理された場所でした。隣接する5つの村は木地郷に指定され、村人たちは、山の監視や伐採、搬出といった仕事を担いました。長谷の山から切り出された材木は、質がよいと評判が高く、「筏下し」といって筏に組んで三峰川から天竜川、太平洋を經由して江戸まで送られ、江戸市中の橋の架け替えや江戸城天守閣の建築用材としても使われました。

天竜川や三峰川が形づくる河岸段丘の段丘面や、天竜川支流が形づくる扇状地は、江戸時代初期までは水が得にくく、荒れた原野が広がる土地でした。江戸時代後期、用水建設に尽力した伊東伝兵衛は、高遠、富県、東春近の広範囲を潤した「伝兵衛井筋(鞠ヶ鼻井筋)」を建設したことで知られています。他にも江戸時代後期から明治時代初頭にかけて、「六道の堤」や「月蔵井」、「木曾山用水」、「艶三郎の井」などが造られ、市内各所で新田開発が進みました。こうした用水の多くは現在まで受け継がれ、稲穂が豊かに実る伊那市の礎となりました。

江戸時代、地方の教育を担ったのは、武士が通った藩校と、武士以外の人々が通った学校(寺子屋や私塾)の2系統がありました。

高遠藩が開いた藩校は「進徳館」で、漢学(儒学)と筆道、武術を中心に教えられました。万延元年(1860年)の開校からわずか10年余りで藩校の役目を終えましたが、通算500人ほどの生徒が通ったといわれています。伊澤修二や中村弥六など、日本の近代化を支えた人材を世に送り出したほか、教師になり長野県内各地で教壇に立った人もたくさんいました。

上伊那地域は全国的にみても寺子屋や私塾が多い地域であったといわれ、伊那市域にも数多くの寺子屋や私塾がありました。寺子屋では、読み書きや算盤(算術)、四書などの素読や詩歌、俳諧、謡い、作法などが多岐にわたって教えられ、私塾ではより高度な漢学、国学などの学問も教えられていました。このように、江戸時代後期の伊那は学問が盛んな地域で、様々な学びを通して成長した人々が、地域を支えています。

※伊那から高遠城下を經由して諏訪方面へ向かう場合、御堂垣外宿までは、杖突街道、金沢街道ともに同じ道筋であるため、両者の名称が混在して使われることがありますが、ここでは伊那方面から御堂垣外宿までを「杖突街道(金沢街道)」と表記します。

御堂垣外宿の分岐より北へ、杖突峠を越えて諏訪方面へ向かう道筋は「杖突街道」、御堂垣外宿の分岐から東へ、金沢峠を越えて金沢宿へ向かう道筋は「金沢街道」と分けて表記します。



集落入口に立つ道祖神や庚申塔



守屋貞治作 准胝観世音  
(市指定文化財)



進徳館  
(国指定史跡高遠城跡内)

## 4-9 明治・大正・昭和初期

江戸時代が終わり、明治政府の下で新たな時代が幕を開けると、社会の仕組みも大きく変わりました。幕府領であった手良、福島、西箕輪は新たに成立した伊那県の管轄となり、高遠藩も明治4年(1871年)の廃藩置県で、高遠県となりました。さらに同年の府県統合で伊那県と高遠県は筑摩県になりましたが、明治9年(1876年)に筑摩県が長野県と合併したことから、伊那周辺も長野県の管下になりました。明治12年(1879年)には、長野県の下に上伊那郡が誕生しています。

府県統合の影響を受けて、大きく様変わりした場所は高遠城です。高遠県がなくなると、城内の役所建物は不要になり、取り壊しが進んだ結果、明治6年(1873年)には完全に更地となりました。その後、明治政府が進めていた公園づくりの方針を受け、明治8年(1875年)に城跡に誕生したのが高遠公園です。全国でも早い時期に誕生した公園で、翌年には早速、公園の景観をつくるために桜が植えられました。その後も段階的に補植されていた桜は、全てタカトオコヒガンザクラという固有種で、大正時代には樹林となった満開の桜の下でお花見を楽しむ風景が生まれました。



満開のタカトオコヒガンザクラ  
(大正時代)

江戸時代の町や村は、明治時代初期に再編成され、明治21年(1888年)に町村制が敷かれると、大掛かりな町村合併(明治の大合併)が行われました。明治22年(1889年)に現在の伊那市域には14の町村が生まれましたが(詳細は資料編に掲載)、上伊那郡役所が置かれた伊那村は、坂下(入舟)や山寺、荒井(通り町)を中心に大きく発展し、明治30年(1897年)に「伊那町」が誕生しました。街道沿いには多くの商店が建ち並び、大衆文化施設である演芸場や映画館などが作られ、昭和5年(1930年)には地域の教育・文化の向上に貢献した上伊那図書館が開館しています。

町の発展には、交通事情の変化も大きく影響していました。明治時代に入り、人や物資の移送手段が徒歩から馬車へと変わり、それに併せて道路整備も進みました。伊那街道は三州街道と名称を変え、明治20年代の大改修で新道に付け替えられると、市街地は新道沿いにも広がっていきました。

明治40年(1907年)には、三州街道と並行する形で伊那谷を南北に結ぶ軌道「伊那電気鉄道」(現在のJR飯田線)の建設が始まり、5年後に「伊那町駅」が開業しました。短時間で大量の物資を輸送できる鉄道は交通の主役となり、伊那町は旧城下町の高遠をしのぐほどに成長していきました。



おざわがわてつきょう  
小沢川鉄橋を渡る伊那電気鉄道  
(丸竹書店発行絵葉書より)

伊那町の商店街に電灯がともったのもこの頃で、大正2年(1913年)に運転を開始した小黒発電所で発電した電力が、伊那町周辺に供給されました。大正5年(1916年)以降、この電力は電気鉄道へも供給されるようになり、地域の足を支えました。

大正8年(1919年)には伊那町と高遠を結ぶバスの運行が始まり、さらに藤澤御堂垣外や長谷市野瀬まで路線は延びました。

近代の地域の産業を語る上で欠かせないのは、蚕糸業です。元々伊那谷は養蚕が盛んな地域で、多くの家庭で養蚕を営んで



伊那・高遠間を走ったバス

いました。生糸の輸出増加に伴う繭まゆの需要の高まりとは裏腹に、利益が少なかった養蚕家たちの生活を守るため、東春近の飯島国俊いひじまくにとしは全国初の試みとして、養蚕家が製糸まで行、組合製糸の「上伊那かみいな合資会社」を立ち上げました。自分たちが育てた繭から生糸を生産し、販売することで、労力に見合った収益をあげることができるようになり、各地で同様の組合が立ち上がりました。蚕糸業の発展は伊那の経済を支え、あちこちに桑畑が広がる風景を作り出し、製糸の機械化が進むにつれ、大きな工場ができました。

江戸時代、高遠藩が管理していた三峰川源流域の山々は、近代になると国有林になりました。材木の運搬には川を利用していましたが、大正時代になると水力発電用のダム建設が始まり、材木を川に流すことが次第に困難になっていきました。そこで川流しに代わったのが森林鉄道で、昭和 14 年(1939 年)に三峰川沿いの浦地区うらと、三峰川支流の黒川沿いの黒河内地区くろかわに森林鉄道が建設されました。昭和 30 年代に廃止されるまで、材木ばかりでなく、山で生産した木炭や沿線の山域で暮らす人々の生活物資の運搬、子ども達の通学などに利用され、地域の足となりました。



瀬戸せと峡きょうを走る森林鉄道  
(昭和 17 年(1942 年))

近代は戦争の時代でもあります。日清戦争に始まり、日露戦争、第一次世界大戦、日中戦争からアジア太平洋戦争に至るまで次々と戦争が起こりました。伊那と戦争の関わりを語る上で象徴的な遺跡が、旧陸軍伊那飛行場くまがやりくぐん ひこうがっこう いな ぶんきょうじょう跡地です。上の原の広大な段丘面を利用して、昭和 18 年(1943 年)に建設が始まり、地域住民の動員や学生の勤労奉仕などによって造られました。格納庫や弾薬庫の遺構が現在も遺されています。



きゅうりくぐん いな ひこうじょう  
旧陸軍伊那飛行場跡地

世界恐慌を契機に衰退の一途を辿った蚕糸業でしたが、戦時中には空き工場となった製糸工場跡には、大都市圏から次々と工場疎開こうじょうそが行われました。当時は飛行機部品といった軍需品の生産が行われていましたが、終戦後もこれらの企業は伊那の地に残り、現在の製造業が多い状況につながっています。

#### 4-10 現代(太平洋戦争後)

近代以降、上伊那郡の政治・経済・流通の中心地として急速な発展を遂げた伊那町には、天竜川と並行して通る街道・鉄道沿いに南北2.5kmの中心市街地が形成されました。発展を続ける一方、軒を連ねた木造板葺きの建物は防火対策が不十分で、何度も火事にあってききました。昭和24年(1949年)に通町一丁目の商店街を焼き尽くした「通町大火」をきっかけとして、火事に強いまちづくりが行われ、大通りを2倍に広げ、町内を横切る路地が設置されたほか、外壁をモルタルや銅板で覆った耐火構造の「看板建築」の建物が次々と建てられました。「洋風3階建」の看板建築が建ち並んだ通町一丁目の商店街は「通町銀座」と呼ばれ、昭和30年代には商店街も最盛期を迎えました。通町と天竜川をはさんだ東側に位置する中央区本通り(古町)も、昭和30年(1955年)から行われた都市計画事業により道路が広げられ、商店の多くが看板建築に建て替えられました。通町や中央区本通りには、現在も多くの看板建築が遺されており、昭和レトロな町並みを味わうことができます。

昭和20年代から30年代に進められた昭和の大合併では、伊那市域でも町村合併が繰り返され、昭和40年(1965年)までに伊那市、高遠町、長谷村の3市町村が成立しました(市町村の変遷は資料編に掲載)。

戦後の伊那市域において、広範囲に影響があった大きな事業は、多目的ダムの建設を中心に進められた三峰川総合開発事業です。この事業は、アメリカで行われていたテネシー川流域の総合開発事業をモデルとし、国や県が総力を挙げて取り組んだ事業でした。「暴れ川」と呼ばれた三峰川の洪水被害を減らすため、明治時代以降「霞堤」という堤防がいくつも築かれ、川筋改修なども行われましたが、洪水対策として最も有効に機能したのは、戦後ほぼ同時期に築かれた美和ダム、高遠ダムという2つのダムでした。

昭和36年(1961年)、大雨による未曾有の災害が起こり(三六災害)、上流域の長谷や高遠の山間部では、特に甚大な被害を受けました。しかし、2つのダムが大水と土砂、流木を食い止めたため、下流域の美篤や伊那(竜東)などで大きな被害は出ませんでした。

ダム建設のために移転を強いられた集落もあり、3集落の合計105戸が離村した長谷地域では、その後の過疎化に拍車がかかったと指摘される一方、高度経済成長期と相まって、工事期間中は工事関係者やその家族をはじめ、多くの人が伊那町や高遠町にあふれ、地域経済の活性化につながりました。三峰川総合開発事業により、常に豊富な水が流れる三



とお ちょう  
通町 (昭和41年(1966年))  
(向山雅重氏撮影)



建設中の高遠ダム  
(昭和33年(1958年))



みわ  
美和ダム



増水した三峰川 高遠付近  
(昭和36年(1961年)6月)

峰川の景色は一変しましたが、ダムは貯まった水を農地へ送る<sup>かんがい</sup>灌漑事業に加え、水力発電事業などにも使われ、私たちの生活を支えています。

高度経済成長期の社会構造の変化は、山と人との関わり方も大きく変えました。山林資源が地域を支えた時代に賑わった<sup>やまあい</sup>山間の集落では、土砂災害やダム建設計画の推進によって離村や集落移転が相次ぎ、多くの人が山村集落を離れました。その一方で、山岳エリアでは新たな取組が進められています。昭和39年(1964年)に長谷の山岳エリアが南アルプス国立公園に指定され、昭和55年(1980年)に南アルプス林道が開通すると、山を観光資源として積極的に活用する動きが生まれ、長谷には南アルプスの登山基地として多くの人を訪れるようになりました。



南アルプス林道を走る林道バス

平成20年(2008年)には南アルプス(中央構造線エリア)ジオパークが日本ジオパークに認定され、さらに平成26年(2014年)には、南アルプス地域が南アルプスユネスコエコパークに登録されました。南アルプスの自然環境を保全しながら、文化や人との関わりを、親しみながら学ぶ取組が進められています。

交通面では、中央自動車道<sup>にしのみや</sup>西宮線の建設が進み、昭和51年(1976年)に伊那市域の区間<sup>いほく</sup>(伊北IC～駒ヶ根IC)が開通すると、遠隔地への移動が一層便利になり、物流も活発化しました。平成18年(2006年)には、国道361号の一部である伊那木曾連絡道路<sup>ごんべえ</sup>権兵衛トンネルが開通し、木曾地域と<sup>ひだ</sup>飛騨地域ばかりでなく、中京圏までも視野に入れた広域観光振興や、地域連携による産業活性化の動きがみられます。

平成18年(2006年)3月に伊那市、高遠町、長谷村の3市町村が合併し、現在の伊那市となって15年以上が経過しました。合併後、伊那、富県、美篁、手良、東春近、西箕輪、西春近、高遠町、長谷の各地域には地域自治区が設けられ、新たに発足した地域協議会が中心となって、それぞれの地域資源や地域の課題、特色を活かした個性あるまちづくりが進められています。